

情報リテラシー基準に基づく講習会プログラム

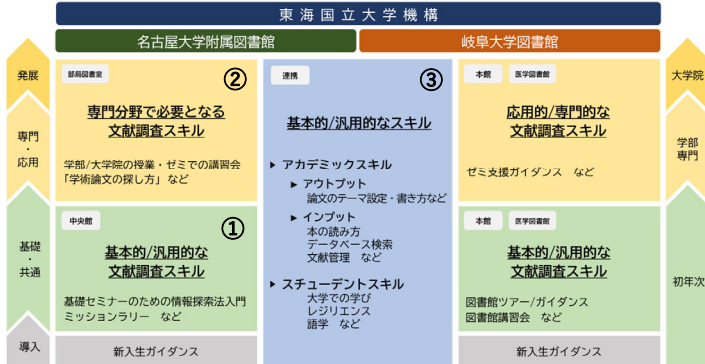
名古屋大学附属図書館では、「名古屋大学附属図書館情報リテラシー基準」(※)を策定し、それに基づき様々な講習会プログラムを企画・実施しています。
所属を越えた職員プロジェクトチームが、教員と連携した情報リテラシー教育の組織的・体系的な実践に取り組み、教養教育、専門教育において学生が主体的でアクティブな学習者となるように、情報リテラシー能力向上に努めています。

名古屋大学附属図書館
情報リテラシー基準

名古屋大学附属図書館
講習会年間プログラム

(注) 国立大学図書館協会「高等教育のための情報リテラシー基準(ドラフト2.1)」における情報リテラシーの定義及び情報リテラシー基準を参照

東海国立大学機構の図書館における学術情報リテラシー教育



① 初年次教育における講習会

学部1年生必修「基礎セミナー」におけるモジュール授業

全学教育の枠組みの中で、アカデミックスキルとしての「文献の調べ方」に関する授業を、オンデマンド3コースと対面1コースで提供しています。教員の申込みにより授業の1コマとして実施され、オンデマンド授業は課外での視聴や教材利用も可能です。対面授業は、事前に動画を視聴したうえで演習を行う反転授業としています。

プログラム/対象/担当	達成目標	コンテンツ	リテラシー基準
「基礎セミナーA」 オンデマンド3コース授業 対象:基礎セミナーA 担当:調査学習支援グループ 学術情報リテラシーPT	・主題に沿った文献調査の流れを理解する ・主題の概念を把握し、適切な用語で検索できる ・情報源の性質を把握し、調査の目的に適した資料を選択することができる ・図書館の情報資源とサービスを活用し、必要な文献を入手することができる ・学術情報の利用とアクセスに関するルールを理解し、正しく利用することができる	資料の種類と特性 基本知識を得る 目的を絞る 図書館の調べ方・読み方 論文の探し方・読み方 論文の選び方・読み方 論文データの探し方 著作権と引用・参考文献リスト	1 2 3 4 6

(2024年度実績)
54回実施、566名受講
受講率は対象としている
学部1年生の25.6%

② 専門教育における講習会

学部を担当するすべての部局図書館・図書室で、講習会を実施しています。
実施にあたっては、効果的な学習支援となるよう、教員や学生へのインタビューを通じてニーズを把握し、各部局の教員と相談しながら、講習内容や実施時期を検討しています。

実施状況

■講習会開催回数(回)・人数(人)

図書館・室		2022年度(R4)	2023年度(R5)	2024年度(R6)	講習会の主な対象/実施形態					
					基礎(全学)	専門(学部)	専門(大学院)	専門(大学院)	専門(大学院)	専門(大学院)
中央図書館 (※部局図書館を含む)	回数	25	49	54	授業内	授業内	授業内	授業内	授業内	授業内
	人数	425	546	566						
医学部附属図書館	回数	3	3	2	授業内	授業内	授業内	授業内	授業内	授業内
	人数	172	188	203						
文学部図書室	回数	2	5	4	授業内	授業内	授業内	授業内	授業内	授業内
	人数	293	218	229						
教育発達科学図書室	回数	4	4	4	授業内	授業内	授業内	授業内	授業内	授業内
	人数	64	84	95						
法学図書室	回数	5	4	5	授業内	ゼミ	ゼミ	授業内	授業内	授業内
	人数	73	93	65						
経済学図書室	回数	18	10	11	授業内	ゼミ	ゼミ	授業内	授業内	授業内
	人数	302	82	129						
情報・言語合同図書室	回数	2	4	4	授業内	授業外	授業外	授業外	授業外	授業外
	人数	22	57	50						
理学図書室	回数	2	2	1	授業内	授業外	授業外	授業外	授業外	授業外
	人数	26	26	26						
工学図書室	回数			3	授業内	授業外	授業外	授業外	授業外	授業外
	人数			305						
生命科学図書室 (※初年度3月実施を含む)	回数	4	6	6	授業内	授業外	授業外	授業外	授業外	授業外
	人数	251	268	232						

※中央図書館の授業連携講習会以外の統計は「名古屋大学附属図書館(中央図書館分)統計」(利用統計(中央図書館))を参照

内容例



学生の声

- ・自分の興味、関心のある領域での実習を企画していただいて、熱量をもって取り組むことができた
- ・文献調査について、その必要性と必要となる場面から説明してくださり、文献調査の目的を理解することができた

教員の声

- ・授業に組み込み形で「講習会」を開催したことは受講生数のみならず質的にも大いに効果がある
- ・単に学術論文の探し方にとどまらず、学術研究を始めるにあたって基本的なことが大変よくまとめられていると思います。できれば学生全員を対象にした方がよいと思います

③ 大学院生サポートスタッフとの協働による学習支援

学習サポート企画

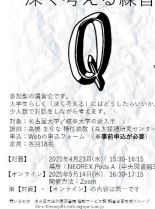
レポートの書き方についてのミニ講座や相談会、語学ワークショップ、学習の参考になる展示など、現役大学院生ならではのアイデアを出し合い、教職員と協働してユニークなプログラムを多数開催しています。岐阜大学開放・共催プログラムも開催しています。
取り組みをまとめた刊行物も好評で、名古屋大学学術機関リポジトリで公開しています。

『アカデミックスキルズ』
『卒論を書いた人の「声」』
『中国語会話入門 初級編』



大学1年生のための学術的基礎力
ワークショップ

深く考える練習



(2024年度プログラム数)
サポートスタッフイベント 22件
教職員・外部講師との連携イベント 27件
参加者総数 2,280名
うち、岐阜大学開放・共催イベント 28件
岐阜大学参加者総数 78名

サポートデスク

中央図書館ラーニング・commons内
平日15-19時
対応言語: 日本語・英語・中国語
パソコンの使い方、調べもののコツ、レポートの書き方やスタッフの専門分野に応じた相談等

サポートデスク公式SNS (X/note)

相談の多いトピック(レポート・卒論での困りごと、指導教員とのコミュニケーションなど)についてアドバイスを書き溜め、学生の皆さんを応援しています。

X

note

note

note

相談件数は
年間約150件

活動を支える職員の研鑽



学術情報リテラシープロジェクトチームを組織して、知識や技術の習得・共有、最新情報のアップデートを目的として、研修と知見共有を行っています。

研修

① 教員との連携を考える

【目的】背景と意義を理解し、教員連携に関する理論と手法を学ぶ
【日時】令和4年3月8日(火)13:30-17:00(オンライン)
【講師/報告者】長澤多代氏(三重大学准教授) 堀友美(PT主催)
【参加者】25名(名古屋大学、岐阜大学、三重大学、皇學館大学)
・学術情報リテラシー教育の背景と枠組み(講義)
・名古屋大学附属図書館における情報リテラシー教育の実践(報告)
・学術情報リテラシー教育のための教員と図書館員の連携(講義)
・グループワークおよび発表・意見交換・講評

② 教授法を学ぶ

【目的】効果的に伝えるための「教え方」の理論と手法を学ぶ
【日時】令和4年12月15日(木)13:30-16:00
【講師】齋藤 芳子氏
【参加者】名古屋大学18名、岐阜大学1名
・教えるために何を考え準備したらよいのかといった教授法の基礎にかかわる事からについて学ぶワークショップ
・意見交換・講評

③ 講習会のためのスライドデザイン

【目的】教材としてのスライドデザインの基本と実践的なスキルの習得
【日時】令和5年12月19日(火)13:30-16:00
【講師】齋藤 芳子氏
【参加者】名古屋大学16名、岐阜大学1名
・「教材」の作成目的と位置付けや、前提となる理論、スライド作成時のデザインの基本やテクニックについて学ぶワークショップ
・意見交換・講評

④ 学習サポートの技術を高める

【目的】実習中の学生サポートを的確に行えるようになる
【日時】令和6年11月18日(月)13:00-15:00
【講師】学術情報リテラシーPT 知見共有・研修班
【アドバイザー】高等教育研究センター 助教 齋藤 芳子氏
【参加者】名古屋大学21名(うち聴講参加3名) 岐阜大学1名
・「机間指導」の機能とポイントについて
・実習サポートの事例共有と意見交換、検索指導例の共有
・ロールプレイ(事例・補助者)による体験と意見交換、発表

知見共有

R4年度

第1回: 授業設計、目標設定(10/11)
【ワーク】講習会の目標の見直し・作成
第2回: 講義法、伝える技術(11/25)
【ワーク】意識する項目、テクニックの確認
第3回: 授業計画(12/24分)(2/3)
【ワーク】授業計画表の改善点
・『シンシズ大学の教授法(玉川大学出版部、2015-)』の内容紹介とミニワークをミーティング内で実施
・知識の再確認、PT内の知識・経験の平準化の一助に

R5年度

第1回: 生成AIを体験する(11/7)
【テーマ】生成系AIによる文献検索、文章生成
【内容】大学生のレポートを想定した小論文を生成AIに書かせ、現時点におけるAIの限界と注意点を知る
第2回: AIで論文を読む(2/16)
【テーマ】生成系AIによる論文読解
【内容】生成系AIを用いて英語論文を読解し、自分で英語論文を読む場合と比較して生成系AIの利点と注意点を考える